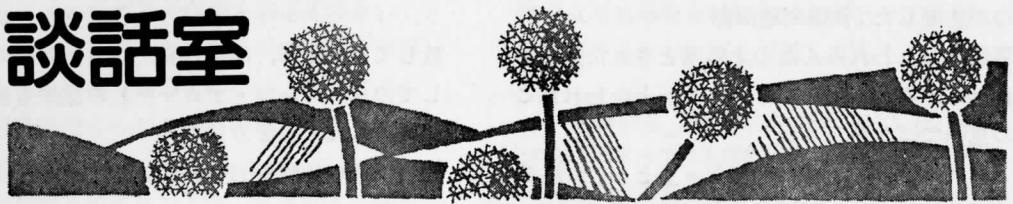


# 談話室



## 教育における性善説と性悪説

西山 豊

学年末試験の頃になると、いつも気になることがある。学生たちは、黙々と勉強し、単位がもらえるのかと不安をつのらせ、いつもおびえている。大学が大学のようではなく、これでは高校の延長だ。季節が冬であることも重なり、20年前の大学紛争時のことと思えば、何とさめきった、心の中まで寒々としたものを感じるのは私だけだろうか。

私は、試験前の最終講義に、学生に昔話をする。「君たちにはうらやましい話だが、私の学生時代は、試験の前になるとどういうわけかストライキが決まった。そして試験はすべてレポートに変わり、ほとんどの学生は合格した。試験で落とされるというのは、よほどの理由がないかぎりなかった。もっと勉強がしたいので留年します」と本人の申し出がないかぎり、大学は追い出されるものであった。今は本人の申し出がなくとも、試験でしっかり落とされ、卒業できなくなっている。20年もたつとこんなにも変わるものなのだけれどね」と。

本誌、談話室の欄に植村幸生氏の「講義中の私語対策」(1990.2)というのがあった。私の大学でも問題になっており、学内の“キャンパスだより”にとりあげられている。どうしてこのようなことが問題になるのであろうか、また問題にされなければならないのか一瞬戸惑うのである。

私は、企業で14年間情報処理に関する顧客教育を経験し、大学で5年間情報処理科目の講義を担当している。企業での教育と大学での教育は、その性格からも大きく違う。企業では業務上の目的を持った社会人に対してなされ、規模も20名前後のものである。コンピュータを扱えるようにするといった目的意識がはっきりしているので、教える側と教えられる側にお互いの了解ができている。したがって、受講生に「私語」はない。眠ければ顔を洗ってくるし、コーヒーを飲んで目覚ましをする。大学での教育は、社会に巣立つ前の学生に対し、情報化社会に生きていくための一般教養としてなされ、200~300名の黒板講義としておこなわれる。規模が大きく学生にもさせしまった緊張感がないと、お互いのおしゃべりが始まる。

「私語」にはそれなりの理由がある。学生のマナーの悪さ、講義が面白くない、マスプロ教育、言い出せばきりがない。最近は下宿生が減り、自宅から通学する者が増えているという。片道3時間かかるても通学したほうが得という経済事情がある。その分だけ学生に負担をかけている。学生たちの多くは通学で疲労している。友達と話す機会も時間も少なく、その分を講義のおしゃべりで補うのである。学生たちは、意外と孤独である。

大学紛争時は、ゆったりしていた。クラス討論をしますということで、簡単に講義がつぶれた。教員も理解がよかった。否、学生の圧力に押されてそうせざるを得なかつたのかもしれない。当時の学生たちはクラス討論で十分おしゃべりをしているから、講義で私語をすることはなかった。

「私語」とならんでもうひとつ「出席」が問題にされている。「出席」といえば、以前は体育実技と第二外国語だけだったと思う。これはやむを得ないであろう。ところが最近では一般講義も出席を重視するようになってきている。出席日数を成績にいれるというのである。私は、教育とは出席したかどうかではなく、本人がどの程度理解したかが大事であるので出席は重視しない。出席カードだけ出して寝ていれば意味のことである。それでも学生は「先生、出席をとって下さい。まじめに受けているのだから」という。困ったものだ。

「私語」と「出席」の二つに共通することは、学生は甘やかされると講義はさぼるし、講義中におしゃべりをする、したがって、教員が厳しく取り締まればよい、そうすれば、引き締まった講義になるというのである。この考え方の背景には、学生の教育に対する態度をどう見るかに關係している。学生はもともと勉強することが嫌いで苦痛である。それをやらせるのは強制力だけであるとする立場である。教育に夢と可能性を信じている私にとっては、この考えは好きになれない。

本当に講義の内容が面白く、話し方も退屈しなかったら、出席をとらなくても学生は講義に出てくるし、私語もしないであろう。寄席の世界では、落語家の話が退屈すればヤジをとばされるか、客が一人も寄りつかないといった厳しい状況がある。芸能人と大学教員を同じに扱っては困るという意見もあるが、意外と似たところがある。

性善説と性悪説という言葉がある。孟子と荀子の説であるが、この言葉は教育の現場にもあてはまるよう思える。私は性善説を信じたいし、その立場で講義をしている。単位を気にするな。よほどのことがないかぎり落とさない。時間が取れないのなら無理に出なくてよい。講義ノートは大学の近くの書店で売られてある。どうしても分からぬとき、

気が向いたら出てきなさいなどと学生にいふ。これは別に人気を取ろうというのでもなく、甘やかしてるわけでもない。このようにいふと、学生は意外と天邪鬼のようなところがある。出なくてよいといわれれば出たくなる。単位を気にするなどといわれるとリラックスして勉強するものだ。イソップ童話に「お日さまと北風」というのがある。旅人が着ているオーバーを脱がせるのは北風ではなく太陽である。学生の勉学意欲の心を開かせるのは、強制力ではなくて疑問や好奇心である。

私の担当科目が時流にあってることも関係してか、学生の受講率もまあまあの状況である。200名の講義に、真面目に講義を聞きノートをとる者、話だけ聞く者、雑誌を読む者、居眠りをする者が、不思議と調和している。私語はなく、講義が妨害されたことはない。ただ、情報処理の内容は文科系学生にとっては堅くて難しくなりがちである。分からなくてついていけなく眠くなるのは否定できない。

そこで、講義の前にジョークを何個か用意しておいてシナリオも書いておく。ところが学生はこちらが予定していたところでは笑わぬ別の場所で笑うようである。20年も年が違うので、世代の違いであろうか、私のものは“うけないジョーク”で通っている。シナリオどおりにいかなくても、結果として学生に受けければよいのであって、講義を退屈にしないための笑いや脱線も時として重要である。

韓国、中国、東欧にみられる民主化の大好きなうねりの背景には、学生がその一翼を担っている。夢よもう一度ではないが、民主化の嵐は日本にももう一度くるのであろうか。教員として教える立場に立った私には、学生に代わって教育民主化の運動を提起することはできない。私にできるのは出席を強要しないこと、単位で脅さないこと、私語をされないように講義を工夫することだけである。

(大阪経済大学・情報処理)